

盛綱陣屋

渥美清太郎

〈出典：「演劇界」昭和34年7・8月号〉

省略されてしまった凱陣

『盛綱陣屋』的一幕について申し上げます。以前はあまり、しげしげと出る狂言ではありませんでしたが、羽左衛門吉右衛門鴈治郎が、それぞれ特色を示すようになってから、急に流行り出してきたものです。近松半二の作『近江源氏先陣館』の八段目、全体が大坂陣を脚色したものであること、その他、内容に至っては皆さん御熟知ですから別に申し上げません。『近江源氏』というのは、今の滋賀県一体に勢力を持つ源家の一団でして、頼朝三代は亡びましたが、各地にその枝葉が残り、宇田源氏、信農源氏、甲斐源氏、木曾源氏などといって、なかなか北条氏には屈しなかった、その一つなのであります。この曲では、頼家が時政の圧力に堪えきれず、近江の坂本に城を築き、そこに落ちついて時政即ち家康に対抗する筋でしたから、近江源氏という名を持ってきたのでしょう。主人公の盛綱は真田信幸、つまり幸村の兄の当て込みであります。

舞台は陣屋ですから常式で、高二重に正面が襖、上手に一間、平舞台下手に陣屋木戸、など、熊谷と大してちがいません。ドンチャン、つまり遠寄せで幕があきますと、二重の上に淡紅色の衣裳の腰元が五六人、座っております。いつものように噂ばなしで、盛綱の子の小三郎が高綱の子の小四郎を、初陣で生捕りにしたという会話で、本来これはありません。歌舞伎で常式として附けたのです。その代り本文には、初めから微妙と早瀬が出ているのですが、これは「旦那のお帰り」の呼びで出ることにしてあります。微妙が早瀬に忌味をいうくんだりも抜いています。微妙は白の切髪に帽子のついたカツラ、早瀬は片はずし、ともに襦袢を着ています。^立帰る佐々木盛綱で、花道から盛綱が出て参りますが、これは一人で出る場合と、縛られた小四郎と、小三郎と雑兵をつれてくるのと二通りあります。前者のほうが引立つので、多くこれが用いられていましたが、この「凱陣」は近ごろカットと相場がきまってしまったので、どうにも仕様がありません。最後にやったのは羽左衛門でしたが、二時間半かかりました。全く時間のためなのです。これは微妙と小四郎のあいだなどを、うまく抜いて、アレンジすれば、凱陣も見せられると思うのですが、そこまで苦勞する人もないようであります。

義太夫狂言の彩り

「囚人を引いだせ」と盛綱がいうと、^無惨なるかな小四郎は」で縛られた小四郎と、小三郎、雑兵の出るのが普通でこのほうが子役も儲かります。

^兵衛盛綱謹しんで」で、微妙に自慢話をいうところは、陽気にやらなければいけません。縛られた小四郎を見たら陽気になれる理屈ありませんが、あとが静かに、落ちついた演出ばかりになるので、無理でもここは、派手に早目にやってもらわないと、余りにも芝居

が陰鬱になって、ダレてしまうからであります。ここは先代鴈治郎がうまいものでした。

「和田兵衛秀盛どのお入り」と呼びがあります。或いは雑兵が知らせにくることになってもあります。「ハテ心得ぬ」と盛綱のセリフがあつて、微妙早瀬腰元は奥へ、雑兵は小四郎をつれて上手奥へ入ります。微妙と小四郎のあいだの愁嘆、これが母の仕事の第一段であります。なお盛綱のカツラは羅紗張りの生締、衣裳は織物の上下ときまっておりますが、九代目団十郎は烏帽子大紋でやったそうです。例の活歴の癖が頭をもち上げたのですが、むろん型ではありません。ところが、凱陣があると、そのままで秀盛を出迎えますが、このごろは前の方をカットしますから、呼びを聞いて、奥から、刀を持って出で、下手寄りに迎えます。迎えるといつても、いつものお上使のお入りとちがひ、敵方の大将分がくるのですから、両手は突きません。ただ敬意を表するだけです。「甲冑の姿ひきかえて」で花道へ和田兵衛が出てきますが、これは後藤又兵衛の穴ですから、和田ビョウエではいけず、和田ベエと呼ぶのが本当です。顔は赤、黒ピロウドの着附けに、赤地錦の長上下という物々しいこしらえですが、これは一から十まで、盛綱の白ッ面、立役ぶりとの対照を見せるわけで、歌舞伎へ入った義太夫狂言には、こうした演出の上の用意が、しばしば見られます。「珍らしや秀盛どの」から、舞台へ来て二重へ上がり、盛綱と向い合いになります。

三婆の一・微妙

ここの二人の詞争いは、いわば虚々実々というところで、なかなかの見せ場です。秀盛が小四郎を返してくれという、あんな小倅のことで侍い大将がくるとはおかしいと嘲る。その小倅を生捕ったのを一国一城でも取ったように、勝鬨あげて騒いだのは何事だとやり返す。イヤ生捕り帳に記した以上は渡すことはできないと刀に手をかける。それなれば時政の陣所へゆき、直談判でもらって帰ると息まく。実をいうと二人とも、争いは表だけであつて、実は腹の探りっこをしているところがおもしろいのです。そこで盛綱の「珍説々々」や「その座一寸も立たせばせじ」や「ずいぶん御酒を合点か」——秀盛の「この和田の首、進上申す」や、「お肴のとび道具」や「案内大儀」などのセリフまわしがむずかしく、活け殺しのおもしろさが、よく出てくるわけです。動きは和田兵衛のほうが派手で、軍兵が四人、槍を持って出て、それを一せいに舞台へ打ちつけると同時に、内ぶところから両手を出して、キッと大見得になる。ここらは誰れがやっても喝采されますが、それだけに豪放なタイプでないと、大きくは見えません。なおこれまでは口なので、義太夫も御簾内で語り、微妙はただ茫然と」から出語りになるのが規則になっています。

盛綱は、弟の本心を察しることができません。ただ一途に、我が子可愛さのため、和田兵衛を取返しによこしたと信じているので、前半三分の二はそこから芝居が生れています。つまり、そんな女々しい料簡なら、小四郎を生かしておくことはできない。ひいては頼家方の不為になる。そう考えるのが、軍慮を帷幕の打ちかたむき、思案の扇カラリと捨て」のあいだであります。ここにはいろいろ型があつて、扇で頭を押え、それを落す人もあり、目をとじて扇を捨てる人もあり、膝をたたく人もあり、一様ではありません。役者はそれぞれ工

夫していますが、それだけきまったやり方もないようです。「母人、それにおわするや」で、微妙が出てくると、「御老体の母人に、お頼み申さにならぬこと、申さぬ先から心得たとある、御誓言が、承りたい」――

ここは、今までよりズッとむずかしく一つ間違ったら、盛綱も微妙も弛れてしまい、見物もウンザリしてしまいます。そうでしょう。お祖母さんに、可愛い孫を殺してくれと頼むんですから。それにまた、その無理を納得してもらうために、かなりな長ゼリフをいわずに、何とか形で感銘させようと思うと、^{（ア）}修羅の巷の責め太鼓。とか、^{（イ）}聞き分けてたべ母人と。あたりの義太夫に乗って、形をつけるより外はありません。大ていの方は、左手に太鼓を持ち、右の扇でたたき形をいたしますが、これでは太鼓という字に拘泥するだけで、本当の意味は表現しておりません。しかし、外に名案もないと見えて、誰れでもこういたします。また^{（イ）}聞き分けてたべ。では、これも母の膝をゆするような恰好をするだけです。先代鴈治郎は、ここで大いに子供になって、甘ったれるような形を見せたのが、やや滑稽でした。「かならず気強う遊ばせや」で刀を受けとって微妙は上手へ、盛綱は正面の襖へ入るのですが、鴈治郎は襖のかけに立ち、微妙の後姿を見送り、それから締めます。つまり微妙が気後れはしないかと確かめる腹でしょうが、あんまり写実すぎます。大体この微妙役者は、盛綱より一二枚上手の人でないと、盛綱も型なり工夫なりを、十分に発揮できません。それは海老蔵が初役でやったとき、故宗十郎の微妙でつくづく感じたことでした。二人が別れて入る前、寺鐘を打たせ、「はや短月の暮れ近し」といいますが、これはセリフまわしさえよければ、盛綱の悲壮な気持ちを、よく出せるところであります。

これから舞台のふんいきが少し変わるので、^{（イ）}誘われきたる白羽の矢。で揚幕の中でエイと声をきかせると、ドンチャンに、バタバタで、舞台上手の紅葉の木へ矢文が立ちます。花道へ篝火が、陣笠に陣羽織、弓を持って出てきますが、これは和田どのの供まわりに紛れ込み」というセリフによって、昔からきまっているこしらえです。小四郎に逢いたいという愁嘆があると、^{（イ）}洩れてや奥に声たかく。で襖の中で早瀬が、「侍い衆侍い衆、夜まわり怠りめさるるな」と声をかけ、長刀か半弓を持って出て、矢文を開き、ナンナン、名にしおわば、逢坂山のされかつら、人に知られてくる由もがな^{（ア）}つまり小四郎に脱出せというけ謎にちがいないと、盛綱が高綱を疑ったように、早瀬も弟嫁の未練を恨むわけです。そこで硯を持ってきて、矢文の裏へ文をかき、弓で下手の小松へ射かけます。それまでに早瀬の声におどろいて、篝火は下手へ隠れ、早瀬は奥へ入って、再び掃き舞台になります。掃き舞台というのは、役者のいなくなった空舞台のことです。

注進受けと盛綱

さて、これからが大変な舞台で、盛綱にたのまれたとおり、微妙が小四郎に切腹させようとするが、小四郎は母の声を聞いたので、死ぬのはいやだと逃げまわる。まず二十五分はかかるあいだを、老母と子役だけで持ち切ろうというのだから、容易なことではありません。しかし麒麟児の小四郎と、老巧な微妙が揃ったら、それが非常におもしろくなります。小四

郎は本当に未練なのではなく、あとで切腹しなければならないから逃げるので、いわば二重の腹がいる。只の子役ではできません。微妙はそれを知らないから無理に切腹させようとする。はなはだ複雑です。そのあいだに篝火は早瀬の矢文を抜いて、「行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の関、時節を待てということか」ここで門外と二重で、愁嘆の搦み合い、^ゝ恨みは三方三悪道。というチョボがクライマックスです。^ゝ折からサッと山風に。で揚幕の中に遠寄せを打ちます。困じ果てた微妙は小四郎の手を引いて上手へ入ります。奥から早瀬が長刀を持って出て、木戸を開けると、篝火がツイと駈けこむ。それを支えて、「待った待った、高綱どのおかもじ、こりゃどこへ」「ハテ知れたこと、我が子の小四郎とり返す」「滅多にそうはなるまいなるまい。相嫁の初見参長刀に乗りたいか」と、軽い立ちまわりになります。女形だけに色気があります。

^ゝ真中に三郎兵衛。で奥から盛綱が早足で出て、「石山の御陣所に、事ありと覚ゆるぞ。ヤアヤア、小三郎はいずれにある。はや参れ」で、真中で高合引にかかると、「ハア」で上手から小三郎が鎧なりで出る。「早行け」で小三郎は揚幕へ入るが、凱陣がないと、これだけの役なんですから、小四郎とは、くらべものになりません。ここは御存じのとおり、「注進受け」と称し、盛綱が心配したとおりになったので、大いに落胆するところですから、大切に扱わなければなりません。鴈治郎はどういうわけか、抜いてしまいました。衣裳も長袴も変りますが、上だけはつけません。先のうちはこの袴を、保名狂乱のように、ぼかし染にすることが流行ったものでした。

^ゝ引きちがえて、信楽太郎。で、太郎は水入りのカツラに四天、白刃を抜いて持って、バタバタで舞台へ来て、「御注進々々」と、これから高綱が死物狂いに躍り出したことを語ります。このときはまだ高綱が死んだとは申しませんが、太郎が入ったあと、「南無三宝、死なしたり」で前へ出ると、片足を三段へ落すのは、大ていの方がやります。「子ゆえの闇に心くらみ、謀り事におちいったよな。たとえ摩利支天なればとて、数万騎のその中へ、一騎がけの死に軍、討死せんこと眼前たり」で、口惜しきこなし。そのとき上手の障子をソツとあけて、微妙がしおれて座っています。「この上は親の慈悲、仏間で御回向」「盛綱」「母上様、力なき武運の末」。で微妙は障子をしめ、^ゝ残念さよとばかりにて、眼をとじて奥に入る。と、盛綱も悄然と奥へ入ります。それまで篝火早瀬は、後を向いておりすが、このとき上下に分れて、合引にかかります。^ゝ二度の注進。で垂井藤太が出てきますが、これは信楽との対照上、陣笠をかむり、雑兵の姿の三枚目ときまっております。この役が物語りをしているあいだ、盛綱は大急ぎで、舞台の裏で衣裳を着替えます。しかしそんなツナギでも、「諸葛孔明と呼ばれたる、四郎左衛門高綱を、榛谷十郎が討ちとったり」と大切なことを注進するので、いくらツナギでもカットするわけにもゆきません。篝火がおどろいて行こうとするのを、早瀬がとめると、揚幕で「時政公のお入り」と呼びがあります。これで早瀬は篝火に目くばせして、下手へ忍ばせ自分も二重へ上がり、奥へゆきます。

ところで、こういう義太夫狂言は、どんなに長くっても、一ぱい道具ですませるのが本来であり、また廻したりなにかしなくとも、チャンとそれだけで用が足りるようにできてい

なのですが、明治末期には、よく廻り舞台を使ったものでした。中でもおどろいたのは延若で、千疊敷のような広い座敷に、向うへ一面に金屏風を立てまわすという好みで、しかもその二重が常足でした。これじゃア盛綱御殿の段だなんて、悪口をいわれましたが、この二重を常足にされては、小四郎の芝居ができないのであります。

いよいよ時政の出になります。昔は和田兵衛と時政を、一人の役者が兼ねるというやり方が、よく行われました。七代目団十郎、四代目芝翫など、みなそうでした。初めの和田兵衛から時政に替るのは楽ですが、もう一度和田兵衛の赤ッ面に塗り直すのが、さぞ急がしいことでしょう。ところが最近、今の羽左衛門が海老蔵のとき、この二役を兼ねました。別にそのため効果が上がるわけではありませんが、こういう堅い芝居の技巧としては、ちょっとおもしろい気がします。

チョボの「一陽の春をまつ平の時政。は、まつ平を松平と聞えるように語り、そこで、家康を当て込んだなどということは、皆さん先刻御承知でしょう。ここで、一調の合方という三味線に、鼓を加え、時政が花道へ出てきますが、武将が泰然と現れるときには、よく使います。一調というのは、三味線は三挺あっても鼓は一調にきまっていたから、この名前があるのですが、今の劇場では、とても聞えないので、鼓も三調ぐらい使います。

時政の負け惜しみ笑い

ここへ竹の下孫八が駆けつけて、花道へ座り、和田兵衛が御座の間の白旗を奪って立退いたと言います。時政は笑って「敵の中へ鎧も着せず只一人、踏み込むほどの不敵者、汝等が、手に合うべきか」といいますが、この笑いは、豪放ではありません。負けおしみを隠しているのです。六代目はこの役が、ひどくきらいでしたが、座ならびの上から無理におしつけられ、ずいぶん投げてやっていました。しかしこの笑いだけは、作者のねらいどおりやりました。「第一の大敵、佐々木高綱を討ちとつたれば、腹心の害ははらうたり、さりながらこの佐々木、いにしえの将門になら。一人ならず、二人三人の影武者あって、いずれをそれと見わけがたし。誠の佐々木が死に首か、汝がためには現在の弟が首、よも見損ずることはあるまい。盛綱、あの首、実検せよ」そこで古郡新左衛門が首桶をもって下へおり、舞台の真中へ置き、「イザ盛綱どの、実検あられよ」といって、また二重へ上がります。この竹の下、古郡の二人は、まことに仕所のない、つまらない役のようなのですが、下の人たちではなく、相当な役者が出ます。そうしないと、場が肥えず、盛綱が落ちてしまうからであります。

さて、いよいよ首実検になりますが、ここは盛綱の仕所としても、第一の場面です。しかし鴈治郎は、写実的な腹から、ごくサラリとやってしまったので、こうした濃厚な義太夫劇のおもしろさがなくなってしまう、きわめてドライな舞台になっておりました。一番丁寧なのは羽左衛門でして、少し丁寧すぎるくらいですが、ザッと順序を申しますと、「三郎兵衛承り」で時政に一礼し、「むざんや弟が死顔に」で、左膝を進め、首桶の前へゆく。「のみ込む涙、うしろより」で、上手の間から小四郎が忍び出で、首桶を見つめます。二重が平だところまるのはここで、どうせ大して高さはちがいませんが、高二重だと、みんなが気のつ

かないように見え、常足だと、すぐ見つけられそうな感じがするものなのです。二目とも見も分かずで蓋をとると、小四郎が、「父^{とと}さま、さぞ口惜しかろう」といって二重を駆け下り、「わしもあとから追っつきまする」で肌をぬいで切腹します。盛綱は「ヤレ母さん、おとめなされ」と大きな声でとどめ、微妙早瀬が介抱をしますが、ここはこの大武将が、最後のセリフとともに、少々あわてすぎるので、見物はボンヤリ見ておりますが、今までの武者ぶりをだいぶ害するわけ。そこを時政から「猶^{いっよ}はいかに、はや実検」と突ツこまれ、「ハア」なんて平伏するのは、実にぶざまであります。

形式を重んじる首実検

実検となると、松王とちがって、すべて形式を重んじております。したがってチョボは少く、たいてい、カラニ（仕草のあいだを埋める三味線）を、しんみりひかせ、それで首を見ず、正面むきで仕事をいたします。まず懐紙を出して右の脇へおき、それから悲しみの表情とともに首桶の蓋をとり、前へおく。首は見物のほうをむいております。それで首を持って蓋の上へ直し、小柄を抜いて、左の耳をつらぬき、右手に五六枚の紙を持って耳をぬぐい、首を自分のほうへ向け、小刀の耳をかきあげ、右の手を肩衣の襟にかけ、また下ろして、いっしょに目を開き、ジーツと首を見つめます。耳へ小柄を突ツこむなど、妙なやりかたですが、これが、「古実を守り」などだそうです。近ごろは惨酷だというので、カットする人もあるわけです。

ところで、盛綱の気持ちを申しますと、初めは全く弟と信じているから、悲しみの表情で、目をしばたたきますが、よく見ると似せ首だ。オヤ、なんだって、こんなことをしたんだろうと疑問がおこる。それが氷解する。思わず笑がうかぶ。うまくやったなという顔で、ヒョィと小四郎を見ると、アアその切腹も敵をあざむく策略だなということがわかる。アア可哀そうに、主人を偽るのはわるいが、ここは我慢して、あとで切腹して言訳しようと、そこまでの決心を、この実検で見せてしまうのですから大変です。また小四郎も楽ではありません。盛綱の顔をジッと見つめています。盛綱が似せ首といたら、何もかもムダになるわけなのだから、子供ながら、いっしょうけんめいです。だから盛綱が「矢疵に面体損じたれども、弟高綱が首に、相違ない」と小四郎にいいきかせるので、はじめて首を垂れます。「相違ござらぬ。いかにも相違——」で、「ござなく候と、御前に直し、押しさがれば」で平伏するのですが、ここは人によって、ちょいちょいちがいます。

三分もかかる悦喜の笑い

「ホホウ、骨肉の兄が実検といい、首に向って小四郎が、恩愛の涙、切腹の有様、まことの首の証抛明白、思えば昨日はこの首に、うしろを見せし時政が、いま手のもとに誅伐する武運の強さ、ハテ心地やや、嬉しやなア——今といういま時政が、初めて枕を安く寝るも、盛綱がはたらき。我が着替えの鎧一両、当座の褒美にのこしておく。小三郎そのほかには、陣中にて勝ちいくさの恩賞せん。みな万歳を、となえよええ」「ただただおめでとう、存じま

する」。主従大悦喜というところであります。^悦喜のよそおいあたりをはらい、本陣さして」で時政は郎党をつれて花道へかかりますが、人形ですと、ここで時政の「笑い」があります。つまり時政が喜びを露骨に表現するのです。これがまたひどく長いものでして、先代津太夫のときは、三分ぐらいかかったように覚えております。歌舞伎では、さすがにこんなことはできません。笑っても、きわめて簡単であり、たいていは見得をすると、また「一調の合方」になり、一同ひっこむというのが型になっております。

ここで、舞台はシンとする。盛綱は立ちあがり、上手や奥を見まわし、下手に向って「佐々木、高綱が妻篝火、計略の似せ首、しおおせたれば、小四郎に最期のいとまごい、ゆるす、これへ」と叫ぶ。^一ことを、きくまおそしとまろび出で、我が子にひしと抱きつき、わっと泣くよりほかぞなき」で、下手から篝火が出て小四郎にとりつきます。このときは黒の衣裳だけになっております。

微妙が「ムウ、そんならそなたは京方へ、味方をする、心じゃな」「イーヤ、いつかな心は変ぜねども、高綱夫婦がこれほどまで、仕組んだ計略、父がために命を捨つる、幼少の小四郎が、あまり神妙けなげさに、不忠と知って大将を欺きしは、弟への志し」それから高綱が一たん姿をかくすのだらうと、いろいろ説明あって「申し訳は腹一つと、きわめた覚悟も、負うた子に教えられ、浅瀬をわたるこの佐々木」は、むろん本物の盛綱にひっかけたので、最後に「ほめてやれ、ほめてやれ」を一人一人にいい、「ホホウ」で、扇をあげてほめるのですが、ここで、うまいなアと思った役者は、一人もありません。小四郎をほめるのではなくって、みんな自分をほめてしまうからです。それというのが、ここで大派手にやると、見物からバタバタと喝采がきてひどくいい気持ちになるからであります。役者がそんな料簡でいるかぎり、いくら芸がうまくっても、中途半端な舞台になってしまいます。もっともこれは、いま始まったことではありません。昔の評判記を見ますと、どの役者も、みなここは扇をあげて、派手な演出をやって、評判記から、「これでは愁嘆もなにもありはしない」と叱られています。演出としては一応みとめられますが、役に遠ざかるという点は、わるくいわれても仕方がありますまい。

役者のやりたがる芝居

これから小四郎の死、一同の悲しみがあって、「嘆きに紛れおくれたり、鎌倉への言訳、母人さらば」と切腹しようとする、奥から「ヤアヤア盛綱、和田兵衛秀盛これにあり、尋常の勝負々々」と和田兵衛が、上下を脱ぎかけ、短銃を持って出てきます。盛綱とセリフあって、短銃を向ける。盛綱は立って、大刀の柄^{つか}で受ける形をする。^狙いはそれで鎧櫃」で、鎧櫃をうつと、四方に割れ、中から榛谷十郎が、「ワア」と叫んで出る。「見よや」で短銃をポンと投げ出す。とたんに榛谷が、二重から平舞台へポンと返って死ぬのです。ここは、意外でもあり、今までの愁いを消し、人形よりも歌舞伎のほうで、非常に引きたつところがあります。「今また御辺自殺せば、鎌倉への義は立つべきが、佐々木が首は似せ物なりと、たちまち露頭しこれまでも、砕きし心は水の泡、時を待って佐々木高綱、まことはここにと名

乗って出る。その時いさぎよく切腹せば、忠も立ち、義も全し、腹の切りよう、早い早い」

これが盛綱第二の失敗です。実検のあとですぐ切腹したら、こんなことになるのはわかりきったことで、作者もずいぶんノンビリしたものです。「げに誤まったり誤まったり」なんていっているのが滑稽であります。「右大臣実朝の、御座の白旗うばいとりしは、いくさの吉左右」と懐から白旗を出してひろげ、^へとめて見ぬかと出でてゆく」で、下へ下りると、盛綱は入れかわります。それから、こうした三段目物にはよくある、づくしがついています。つまり『寺子屋』の、いろは送りのようなものであります。これは場所がらだけ近江八景づくしで、人形では、やはり『寺子屋』と同じく、門火を焚き、一同浄るりに乗って動きますが、実は太夫さんが声をきかせる場所になっています。しかし、歌舞伎では、どうにも持ちあつかえますから、みんなの割ゼリフにしてごまかしてしまうのです。

^へゆうべを照らす瀬田の橋」から「さらば、さらば」で三重になり、和田兵衛は下手で、ひらいた白旗を首へかけ、下へ垂らした見得。盛綱は三段へ上がり、右の長袴を階段へ垂らし、左手へ大刀をかまえた見得。女三人は、小四郎の死骸へとりついた形で、幕になります。鳴物は「段切れ」という太鼓で、義太夫劇の幕切れには、始終よく使われるものです。

こうして、一二の欠陥はありますが、何しろ役者としたら、思う存分、芝居ができるので、役者から望む場合が多いわけであります。しかし、相手の微妙になる役者が拙かったら、盛綱だけが一人、いくらうまくっても、おもしろい舞台を見ることはできません。むつかしいところですよ。